

天武朝の人麻呂

1

遠く万葉の時代から、柿本人麻呂は和歌史にあって、常に最高峰に君臨しつづけてきた。だが、その経歴は全く不明であり、生涯は万葉集に残された作品から帰納する他に方法はない。人麻呂は近江荒都歌（巻一、二九―三一）を以って万葉集に登場する。成立年代不詳ながら、人麻呂の最も初期の作品と考えられ、持統朝初期に収載されている。即ち、人麻呂の作歌制作年代は持統朝に始まる。

近江荒都歌の作品としての完成度は、それ以前の歌歴を想像させるのに充分である。当然、その歌歴は持統前代の天武朝に求められよう。事実、人麻呂歌集の年代は天武九年にまで溯り得る。ここでは、天武朝における人麻呂、即ち、万葉集登場以前の経歴について考察したい。

天武朝に於いて、人麻呂が、民謡的色彩の濃い環境の中で歌を集め、作歌した時代――仮に作歌修行時代と呼ぶ――があったのでは

ないか。人麻呂文学の基礎に民謡の要素を考えようとするのが小論の目的であり、同時に、人麻呂が持統朝に作歌するに至る道筋を探るための足がかりを得ようとするものである。

2

歌は古く、集団による民謡から個の抒情詩へ、という過程をたどって展開した。その意味において、抒情詩の源泉を民謡に求めることができる。民謡を抒情詩と区別しようとする考え方は、古代歌謡の実体を明らかにする上で、又、古代歌謡と万葉集のつながり、さらに万葉集の歌を考える上で、確かに有効な方法と言える。土橋寛氏は、民謡が抒情詩であるかないかを問題にされ、抒情詩と対照されるべき民謡の特性を次のように要約された。

(1) 歌の場の集団性

(2) 歌い手と聞き手との未分化、ないし平等関係

(3) 儀式歌と雑歌とによる集団的構成

(4) 歌の目的ないし機能の現実性、功利性（儀式歌の呪術性、雑歌の行動指示性と社交性）

(5) 素材に対する客観的、批判的態度

(6) 場への依存性と即境的発想法

又、同様な観点から、抒情詩の特性を、

(1) 特定の具体的な場はない

(2) 作者と読者との分化、及び支配服従的關係

(3) 客観的な構成の原理はない

(4) 歌の目的の抒情性、非功利性（自己表現を目的とすること）

(5) 素材に対する主観的、詠嘆的態度

(6) 作品自体の完結性

とされた。ところで、人麻呂の宮廷讚歌・殯宮挽歌を想起してみよう。土橋氏の要約された6点の中、民謡の特性(1)(2)(3)、抒情詩の特性(1)(5)(6)を充たしている。民謡ではない、創作詩歌である人麻呂の歌が民謡の特性を有しているのである。なぜか。一つには、万葉集の歌が民謡から抒情詩への過渡期に位置していたこと、人麻呂が正にその分岐点に立っていたことによる。又、一つには、人麻呂の作歌制作の「へ場」の性格と「へ場」への依存度が高いことによる、と思われる。土橋氏自身、

わが国の詩歌の歴史をみると、右に述べたような概念と特長をもつ完全な意味での抒情詩とともに、完全な意味での抒情詩とはいえぬものも多い。

と言われ、それは、

儀式的な讚歌や挽歌、宴席で作られる和歌も、作者の熱情や感動を歌うよりも、儀礼的、社交的に詠まれている。

からだとされ、抒情詩を広義・狭義に分けることができると説いておられる⁽²⁾。即ち、抒情詩には広狭二義が考えられ、前者は多分に民謡の特性を有するもの、後者は先の6点を充たす純粹なる抒情詩を言う。万葉集には広狭両義の抒情詩が混入していて、その区別がつかかねるもの、さらに民謡との区別が明瞭につきかねるものが存在する。その数は以外に多く、この現象は、和歌史における万葉集の位置によるものだと思われる。

ここで注目したいのは、民謡でも狭義の抒情詩でもない。広義の抒情詩——民謡の特性を示し、誦詠性があり、一般に広く流布されていたもの——である。詩歌と民謡の中間に位置する歌、厳密に言えば、民謡から抒情詩への過渡的な段階のもの、民謡とも芸謡ともつかず広く歌われた歌。前者には（巻十七、三九四三——三九五二）等をおげることができ、後者には（巻十六、三八一六——三八二〇）がおげられる。土橋氏は前者を「集团的詩歌」と名づけられ、⁽³⁾後者について阿蘇瑞枝氏は、

万葉の時代、民謡ともつかず、人々に好んでうたわれる歌が多くあったことは想像に難くない。（中略）作者が忘れられ、歌だけが遊離して、その調べのよさと詩情への共感とから、人々にうたわれた歌

と言われ、「民間歌謡」と称されている。⁽⁴⁾万葉集には、誦詠性があり、民謡・芸謡ではないが広く世間に流布され、時に応じて歌われた歌が収載されている。このように考えると、宮廷人の間で広く歌われた歌が存在したであろうことが想像される。もと個人の創作歌であったものが、あるいは民謡が、相聞的発想・旅情を歌う内容への共感、調べの良さから、宮廷人に愛され歌われた、そのような歌

の存在を想像することができる。

万葉集は民謡から抒情詩への過渡期にあった。その流れの、正に分岐点に位置し、身をもって成し遂げたのが人麻呂であった。人麻呂の周辺には、如上の歌が、数多く存在したであろうことが想像されるのである。

3

万葉集は、柿本人麻呂と記す作品を四五〇首余り持つ。その作品

〈表1〉

卷九			卷七		卷三	卷二	卷
挽歌	相聞	雑歌	譬喩歌	雑歌	雑歌	挽歌	部立
1795 1799	1773 1775 1782 1783	1682 1709 1715 1725		1068 1087 1088 1092 1093 1100 1101 1118 1119 1268 1269 1271	244	146	常
5	5	39		12	1	1	部立計
49			12		1	1	卷別計
常合							
			1296 1310	1094 1187 1247 1250			詩
			15	6			部立計
			21				卷別計
詩合							
				1272 1294			その他
				23			部立計
			23				卷別計
その他合							
総計							

を、題詞及び左注の記述方法により二つに分けることができる。一つは題詞に「柿本朝臣人麻呂の作る歌」とある八十首余り、一般に「作歌」と呼ばれるものである。他方は、左注及び題詞に「柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ」等とある、「歌集歌」と呼ばれる三七〇首である。作歌は人麻呂の手になる確かな作品であり、歌集歌は、全て人麻呂の作であるのかないのか、一部他人の作品が含まれているのか等々、問題がある。三七〇首もの歌数を擁する歌集歌を巻別・部立別に分類すると次のようになる。

卷三			卷七				卷十					
發 思	陳 寄 思 物	心 正 緒 述	發 思 旅	陳 寄 思 物	心 正 緒 述	旋 頭 歌	冬 相 聞	秋 相 聞	春 相 聞	冬 雜 歌	秋 雜 歌	春 雜 歌
			2508 2512	2415 2434 2449 2450 2465 2483 2484 2490	2368 2410					2312 2315	1996 2033 2094 2095 2178 2179 2234	1812 1818
			5	8	2					4	43	7
			15				54					

135

3127 3130	2851 2863	2841 2850	2513 2516	2416 2433 2435 2448 2451 2464 2466 2482 2485 2489 2491 2507	2369 2409 2411 2414		2333 2234	2239 2243	1890 1896			
4	13	10	4	85	45		2	5	7			
27			134				14					

196

						2351 2362						
						12						
			12									

39

370

巻九	巻七			
一七〇七	一一〇〇	一〇九二	一〇六八	
6-995 坂上郎女	7-1134 17-4002 家 持 17-4100 家 持 17-4157 家 持	1-37 人麻呂作歌 6-911 笠 金 村 6-991 鹿 人 7-1114 7-1133	7-1103 7-1105	10-2223
一七八三	一二七一	〔二二五〇〕	〔二一八七〕	一一一八
17-4014 家 持	2-136 人麻呂作歌 11-2510 人麻呂歌集 14-3441 東 歌	7-1220 古 集	3-252 人麻呂作歌 上の一本云 7-1203 7-1234 15-3607 19-4202 繼 麻 呂	4-497 人麻呂作歌 7-1166
一七九七		〔二二九一〕	〔二二八〇〕	〔二二七九〕
1-47 人麻呂作歌		4-539 坂上郎女	11-2365 古 歌 集	10-1930

〔表 2〕

常体・詩体等の認定の問題は今はおこう。この歌集歌、集中に多数の類歌を持つ。次に掲げよう。

巻十四	巻十三	
相聞	問答	相聞
	3309	3253 3254
	1	2
	3	
	135	
	196	
3417 3470 3481 3490		
4		
4		
	39	
	370	

卷十一		卷十					
(二三五四)	(二三五三)	二〇一一	二〇〇〇	一九九九	一九九七	(二八九六)	(二八九三)
上の一云	4—565 賀茂女王	18—4105 家持	10—2083 11—2776	12—3093	2—167 人麻呂作歌 3—420 丹生王 8—1520 憶良 9—1764 10—2093	11—2427 人麻呂歌集 11—2748 11—2749 12—3174	11—2834
二四一五	(二四〇九)	二〇九四	二〇三二	二〇二四	二〇二三	二〇一八	二〇一六
4—501 人麻呂作歌	12—3183	10—2098 10—2115 10—2187	上の一云	3—325 赤人 3—422 丹生王 4—668 厚見王	2—135 人麻呂作歌 5—804 憶良	10—2084	8—1518 憶良 10—2048
(二四六六)	二四六五		(二四三四)	(二四四二)	(二四四一)	(二四三九)	二七八
7—1342 7—1347 11—2755 12—3050 12—3063 上の或本歌	4—488 額田王		20—4475 今城	11—2482 人麻呂歌集 11—2779 11—2780 13—3267	4—677 中臣女郎 10—1909 11—2449 人麻呂歌集 11—2450 人麻呂歌集 12—3003	10—2265 16—3818	10—2187

〔二三七三〕	〔二三七二〕	〔二三七〇〕	〔二三六九〕	〔二三五七〕			〔二三五五〕
12-2877 13-3329	11-2547 12-2867 15-3739 宅 守 19-4221 坂上郎女	11-2401 人麻呂歌集 15-3780 家 持	12-2963 13-3329	11-2563	池 主 20-4451 家 持 20-4504 清麻呂	12-2936 13-3298 15-3729 15-3755 宅 守 15-3766 宅 守 17-3974	4-684 坂上郎女 4-687 坂上郎女 11-2558 12-2843 12-2869 12-2914
〔二四三一〕	〔二四二九〕	〔二四二八〕	〔二四二七〕	〔二四二〇〕	〔二四一九〕	〔二四一八〕	〔二四一七〕
4-541 高田女王 4-699 像 見 12-3018	11-2705	11-2714 12-3014	10-1896 人麻呂歌集 11-2748 11-2749 11-3174	18-4073	12-3004	9-1783 20-4392 麻与佐	10-1927
二四八三	〔二四八二〕	〔二四八〇〕	〔二四七八〕	〔二四七六〕	〔二四七三〕	〔二四六八〕	〔二四六七〕
14-3562 東 歌	10-2242 人麻呂歌集 11-2779 11-2780 13-3266 13-3267 14-3562 東 歌	上の或本歌 10-2002 11-2468 人麻呂歌集	11-2754	12-2999	7-1324	11-2480 人麻呂歌集	8-1503 豊 河 18-4087 繩麻呂 18-4088 家 持 18-4115 家 持

〔二三九四〕	〔二三九三〕	〔二三九〇〕	〔二三八三〕	〔二三八二〕	〔二三七九〕	〔二三七六〕	〔二三七四〕
8—1526 憶良 11—2619 11—2664 12—3085	11—2505	4—603 笠女郎	3—472 家持 15—3690 家持	4—691 家持 11—2751	7—1243 古集	12—2960	4—693 千室 9—1769 抜氣大首 11—2596 11—2935
〔二四四八〕	〔二四四四〕	〔二四四三〕	〔二四四一〕	〔二四三九〕	〔二四三六〕	〔二四三三〕	〔二四三二〕
11—2790	11—2600	11—2794	11—2719 12—3021 12—3023	6—1024 対馬朝臣 6—1025 諸兄 11—2728	11—2738	11—2756	7—1383 10—2275
〔二四九九〕	〔二四九八〕	〔二四九七〕	〔二四九五〕	〔二四九二〕	二四九〇	〔二四八九〕	二四八四
11—4479 氷上大刀自	11—2636	4—688 坂上郎女	12—2991 13—3258	11—2551 11—2947 上の或本歌 上の一云	4—575 旅人	11—2706	8—1471 赤人 10—2119

卷主		卷主					
〔二八四二〕		〔二四〇八〕	〔二四〇七〕	〔二四〇三〕	〔二四〇一〕	〔二四〇〇〕	〔二三九九〕
13-3283 15-3647 使人 15-3738 宅守	4-615 山口女王 11-2501 人麻呂歌集 11-2587 11-2634 12-2957 12-3120	11-2808 11-2809	11-2696	12-3201 17-4031 家持 20-4402 子忍男	11-2370 人麻呂歌集 15-3780 宅守	12-2889	14-2482 東歌 15-3588 古歌 15-3775 宅守
〔二八五七〕	〔二八五三〕	〔二四六三〕	〔二四六〇〕	〔二四五三〕	二四五〇		二四四九
4-580 余明軍 4-791 久須麻呂 10-1995 11-2472 人麻呂歌集 11-2473	4-674 坂上郎女 12-2973	11-2670 11-2674	11-2669	4-568 石足 10-2294 12-3089	4-677 中臣郎女 10-2241 人麻呂歌集 11-1909 11-2449 人麻呂歌集 12-3003	12-3141	4-677 中臣郎女 10-2241 人麻呂歌集 11-1909 11-2450 人麻呂歌集 12-3003
	〔二八六三〕	〔二五一六〕	〔二五一五〕	二五一〇	〔二五〇四〕	〔二五〇二〕	〔二五〇一〕
人麻呂歌集上の或本歌 11-2758 12-2857 人麻呂歌集 12-3051 12-3253 12-3254 13-3284	4-580 余明軍 4-791 久須麻呂 11-2472 人麻呂歌集 11-2473	11-2630	11-2593	2-136 人麻呂作歌 7-1271 人麻呂歌集	11-2505 人麻呂歌集 11-2620 11-2734 12-2966 12-2987	11-2633	4-615 山口女王 11-2587 11-2634 12-2842 12-2957 12-3120 13-3283

卷十四	卷十五	卷十六	
(二四七〇)	三二五三	(二八五二)	(二八四八)
4—686 坂上郎女 11—2539	13—3250	12—2964 16—3804 壯 士	11—2544 上の或本歌
(二四八一)	三三〇九	(二八六一)	
4—503 人麻呂作歌 12—3143 14—3528 東 歌 20—4337 牛 麻 呂	13—3305 13—3307	上の或本歌	20—4454 諸 兄 人麻呂歌集 11—2758 11—2863 12—3051 12—3053 12—3054 13—3284
(二四九〇)			
11—2638 12—2985 上の或本歌 12—2988 12—3149 14—3487 東 歌			20—4454 諸 兄

※ (一) は詩体歌 () はその他、無印は常体歌を示す

以上、人麻呂歌集歌三七〇首中、類歌を持つ歌一一二首、類歌数二八二首である。主に佐佐木信綱氏『万葉集研究第3類歌類句攻』を参考とし、漢数字が人麻呂歌集歌、その下が類歌である。歌番号の下の名は作者明確なものの名前であり、無いものは未詳を意味する。尚、右にあげたものは一句以上同句を有する歌で、且つ類想の歌である。従って右の二八二首以外にも類歌と思えば思えるものも万葉集の中には存在する。さらに、人麻呂歌集歌一句一句について集中の同句を調査すれば、歌数は膨大な数になるであろうことが想

像される。

なぜ人麻呂歌集歌が類歌を多く持っているのか、について佐佐木信綱氏は、

人磨歌集は、人磨の歌をあつめたものか、人磨抄記したものが、人磨の歌に他人が書き加えたものか否かは、なほ検討を要するが、平安時代の和漢朗詠集のごとく、広く翫ばれたものであらうことは、その流布伝誦の間に変形した歌の尠なからぬこと、また東歌の中にも入って、東国地方にも伝誦せられたこと、模倣歌

の多いこと等を以て知るべきである。

と言われた。人麻呂歌集歌との類歌の中、作者明記してあるもので人麻呂以後の制作の歌、例えば大伴家持・坂上郎女などは、人麻呂歌集を模倣創作したと考えることができ、又、作者未詳の作品は、人麻呂歌集歌が伝播し、伝誦の間に類歌を生んだと考えることができる。が、ここでは少し視点を変え、なぜ人麻呂歌集歌が類歌を多く有しているのかを追究するのではなく、人麻呂歌集歌と類歌の關係にある歌を調査することによって、人麻呂歌集の性格を考察することにした。

ところで、人麻呂歌集における、常体・詩体の区別は書式による区別である。詩体歌は助詞の省略が多く字数が少ない。多分に詩的感覚が盛り込まれている。常体歌は他の集中の歌と同様である。表1をみよう。常体歌は巻七・九・十・十一に、詩体歌は巻七・十・十一・十二に収載されている。共通の巻は七・十・十一である。巻七・十は作者・制作年代不明の巻であり、巻十一は十二と共に古今相聞往來の歌群で作者・制作年代未詳、類歌が多く伝誦的性格が濃厚な巻である。巻の性格から、人麻呂歌集全体は伝誦的・民謡的性格を帯びていると言える。量的に中心をなす巻は、常体歌九・十、詩体歌十一である。巻九は特殊な性格で、万葉集編纂の際資料とした歌集からそのまま取めたと考えられる。巻十・十一の性格は既に述べた。巻の性格から考えると、常体歌と詩体歌は性格を異にしていると考えられる。次に部立をみよう。

部立におけるその他は、相聞ではないが、内容上、相聞と見做して良いものが多い。即ち、人麻呂歌集は相聞的発想の歌が多く、民謡的性格が察せられる。常体歌は雑歌が多く挽歌を持つ。詩体歌は

〈表3〉

その他	挽歌	相聞	雑歌	人麻呂歌集全体
204	6	25	135	集人麻呂歌集全体
55.0	1.6	6.8	36.5	首%
16	6	7	106	常体歌
11.9	4.4	5.2	78.5	詩体歌
176	0	14	6	その他
89.8	0	7.1	3.1	
12	0	4	23	
30.8	0	10.3	59.0	

挽歌を持たず、圧倒的に相聞(内容的に)が多い。

巻の性格及び部立から、人麻呂歌集全体は民謡的性格が濃厚であると認められた。が、常体歌・詩体歌は収載されている巻・部立共に異なり、恐らく性格も異質であると考えられる。従って、人麻呂歌集に於いては、常体歌と詩体歌を区別して考察する必要がある。以下、区別する立場に立って論を進めたい。

表2を見よう。詩体歌の方が常体歌より類歌を持つ歌が多く、巻十一に集中している。人麻呂歌集歌との類歌二八二首は巻十一が一五八首で他を圧倒し、書式別では詩体歌が一八六首で常体歌の約三倍である。この二八二首の類歌の中、作者未詳歌数一七三首、その内訳を示したのが次の表である。

数値は例えば巻七の人麻呂歌集常体歌との集中の類歌の中、作者未詳歌が8首あることを示している。巻別にみると、巻十一が圧倒的多数を占め、書式別では、詩体歌が常体歌の四倍以上である。こ

〈表4〉

別書式計	卷					總計
	十四	十三	十二	十一	十	
30		3		7	12	8
124			22	87	11	4
19	9			8		2
	9	3	22	102	23	14
	173					

の表から、卷十一の詩体歌がかなり多くの作者未詳歌を類歌として持っていることが認められる。この事実、人麻呂歌集詩体歌が民謡的に伝播され多くの類歌を生むに至ったか、あるいは人麻呂歌集歌が人麻呂以後の時代の人々（民衆）の模倣の対象となったことを示す、と考えることができる。しかしながら、後者の模倣創作と考えることは、卷十一の性格上困難であり、前者の民謡的伝播により類歌を多く持つに至ったと考える方がより妥当であろう。が逆に、卷十一に八七首もの作者未詳の類歌を持っていることは、それだけ人麻呂歌集詩体歌が広く歌われた伝誦的性格を有する歌だと言うことができる。一三四首もの作者未詳の類歌を持つ詩体歌に対して、常体歌は四分の一弱の類歌数で対照的である。このことは、詩体歌が広く一般に流布伝誦した性格を持つとは逆に、あまり民謡的に

流布伝誦しなかったことを示す。つまり、常体歌は、広く歌われた伝誦的性格を示していない、と言える。
右の人麻呂歌集歌との類歌二八二首の中、人麻呂作歌が十一首存在する。

〈表5〉

別計	卷					總計
	十四	十一	十	九	七	
8		2	2	1	3	歌常体詩体その他
2					2	卷計
1	1					總計
	1	2	2	1	5	
	11					
	↓					
	十四	十一	十	九	七	
	4—501	2—167	1—47	1—37	4—497	
	2—236	2—135		2—136		
					
						3—352或上本
	4—503					

表の下の数字は人麻呂作歌の歌番号である。表によれば、巻七が一番多く人麻呂作歌を類歌として持つことがわかり、書式別では、常体歌が詩体歌の四倍の数の人麻呂作歌を類歌として持つことが知られる。常体歌の方が、より詩体歌より人麻呂の手になる人麻呂作歌との関連を有していると言える。明確に言うると、人麻呂歌集常体歌は人麻呂と関連があると、言うことができる。

表2を見よう。人麻呂歌集歌との類歌二八二首の中、作者明確なもの人麻呂と同時代、あるいは人麻呂以後の制作にかかるものは七一首である。巻別では巻十一が多く、巻十二と十がこれに次ぐ。

書式別では詩体歌が常体歌の二倍強である。即ち、卷十一・十二は性格上相聞的発想の歌を多く含むため、後世の人々に好まれ模倣的創作がなされ、詩体歌もまた、人々に好まれる相聞的発想の歌が多いことから、模倣創作されるに至ったのである。表2の作者名の中、万葉集第三期・第四期の作家が多い。やはり人麻呂歌集歌が模倣の対象となったことを示すと思われる。歌数は少ないが、第一期・第二期の作家名がみえることに注意したい。

さて、上の調査の結果を踏まえ、人麻呂歌集常体歌・詩体歌について私見を述べたい。

人麻呂歌集常体歌は、類歌の調査から、伝誦的性格をあまり示さず、人麻呂作歌、つまり人麻呂その人と関連があることが認められた。因みに阿蘇瑞枝氏は、作歌・非略体歌・略体歌について、題材・地理・修辭面において詳しい考察をされ、非略体歌は略体歌と傾向を異にし、作歌の性質に極めて近いことを実証されている。

卷向の痛足の川ゆ行く水の絶ゆることなくまたかへり見む

人麻呂歌集常体歌(卷七、一一〇〇)

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆる事なくまたかへり見む

人麻呂作歌(卷一、三七)

み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまたかへり見む

笠金村(卷六、九一一)

岩走り激ち流るる泊瀬川絶ゆることなくまたも来て見む

紀朝臣鹿人(卷六、九九二)

我が紐を妹が手もちて結八川またかへり見む万代までに

(卷七、一一一四)

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む

大伴家持(卷十七、四〇〇二)

他に家持の(卷十七、四一〇〇・四一五七)、(卷七、一一三三)をあげることができる。上三句は「絶ゆることなく」の序で、歌の主眼点は「絶ゆることなくまたかへり見む」にある。この語句、(卷一、三七)にあつて宮廷讃歌を成立させる上で深長な意味を持つ。故に、人麻呂以後、宮廷讃美の表現として慣用句化したと考えられる。人麻呂が用いることによって有名になり、宮廷讃美の詩句として多くの人に用いられるようになったと、考える。

古にありけむ人も我がごとか三輪の檜原にかざし折りけむ

人麻呂歌集常体歌(卷七、一一一八)

古にありけむ人も我がごとか妹に恋ひつつ寝ねかてずけむ

人麻呂作歌(卷四、四九七)

古にありけむ人の求めつつ衣に摺りけむ真野の榛原

(卷七、一一六六)

塩気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し

人麻呂歌集常体歌(卷九、一七九七)

ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し

人麻呂作歌(卷一、四七)

〈古にありけむ人〉へ過ぎにし君が形見とそ来しは、人麻呂作歌、挽歌などに顕著に表われている、人麻呂の示す〈古〉へ〈過〉にたちかえろうとする傾向を示している。

(卷七、一一〇〇)(卷七、一一一八)(卷九、一七九七)は、

声調・リズム・内容の点から人麻呂の作品と認められる。それぞれ人麻呂作歌に類歌を持つことから、人麻呂独自の語彙を使用していると考えられ、人麻呂の創作歌が優れていることから後に模

倣創作され、あるいは民謡的に伝播し多くの類歌を生んだと、考えられる。詩体歌の相聞的発想のパターンにのった歌と違い、常体歌は既に創作歌であり、人麻呂作歌の特色を豊かに感じることができる。人麻呂歌集常体歌は、人麻呂の手になる作品であると、私は考える。

次に人麻呂歌集詩体歌について述べよう。詩体歌は、類歌の調査から、広く歌われた伝誦的性格を示すことが認められた。人麻呂の周辺には、民謡と抒情詩の中間的な歌、詠誦性があり一般に広く流布された歌、また、当時の宮廷人に喜ばれるような相聞的発想の歌、旅にあつてしみじみとした感慨を歌った歌などが数多くあつたであろうことが想像できることについて、既に2で述べた。詩体歌はこのような歌を集録したものでないかと、考える。例えば

網引する海人とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に來し我を

人麻呂歌集詩体歌（巻七、一一八七）

荒たへの藤江の浦にすぎ釣る海人とか見らむ旅行く我を

人麻呂作歌（巻三、二五二）

浜清み磯に我が居れば見む人は海人とか見らむ釣もせなくに

（巻七、一一〇四）

潮速み磯に居れば潜きする海人とや見らむ旅行く我を

（巻七、一二三四）

白たへの藤江の浦にいざりする海人とや見らむ旅行く我を

（巻十五、三六〇七）

藤波を仮廬に造り浦廻する人とは知らに海人とか見らむ

久米朝臣繼麻呂（巻十九、四二〇二）

の歌は、同様に、当時、都の宮廷人が海浜を旅する時に抱く感情を

歌った歌と思われる。当時の宮廷人は山に囲まれた盆地に育ち、少なからず海に憧れの思いを抱いていた。都会である都に生活し、身分も高い大官人。片田舎の海浜を旅する時、誰しも抱く感情であり、人々の興味をひいたのだと思われる。その興味から人麻呂は（巻七、一一八七）を作歌練習、あるいは作歌指導のため人麻呂歌集に集録し、作歌したのが（巻三、二五二）であつたと考える。誰しも共感し、且つ興味をそそる歌のため、類歌は多く、一般に、宮廷に、流布していたに違いない。人麻呂作歌が、流布していた歌が、時代を経て模倣され、あるいは伝誦され、類歌を生んでいったのではないだろうか。それが他の類歌なのだと考える。

右の歌は旅情の歌であつたが、恋愛を扱った歌なら、なおさらのことである。

恋ひ死なば恋ひも死ねとや玉粹の道行き人の言も告げなく

人麻呂歌集詩体歌（巻十一、二三七〇）

恋ひ死なば恋ひも死ねとや我妹子が我家の門を過ぎて行くらむ

人麻呂歌集詩体歌（巻十一、二四〇二）

恋ひ死なば恋ひも死ねとやほととぎす物思ふ時に來鳴きとよむ

大伴家持（巻十五、三七八〇）

何時はしも恋ひぬ時とはあらねども夕かたまでて恋はずべなし

人麻呂歌集詩体歌（巻十一、二三七三）

何時はなも恋ひずありとはあらねどもうたてこのころ恋し繁し

（巻十二、二八七七）

ますらをの現し心も我はなし夜昼といはず恋ひし渡れば

人麻呂歌集詩体歌（巻十一、二三七六）

うつせみの現し心も我はなし妹を相見ずて年の経ぬれば

(卷十二、二九六〇)

玉梓の道行かずあらばねもころのかかる恋にはあはざらましを

人麻呂歌集詩体歌(卷十一、二二九三)

梓弓引きてゆるさずあらませばかかる恋にはあはざらましを

(卷十一、二五〇五)

他にもあげることができるとして表2を参照していただきたい。右の歌は、地名・人名、あるいは景物・場所・時間等、語句を変えるところによって、いくつでも歌を作ることができる。一つの相聞の発想を利用し、自己の時と場に応じた恋愛の歌を作ることが可能なのである。そのため類歌が多い。即ち、一つの相聞のパターンなのである。人麻呂は、恋愛上の共感から、また、歌が優れていることから、人麻呂歌集詩体歌として集録したのではないだろうか。(卷十一、二四〇一)は同様に人麻呂歌集詩体歌である。相聞で全く同じ発想の歌を二首作るとは疑問である。当時、宮廷あるいは民間に類想の歌が広く好んで歌われていたと考える方がより妥当と思われる。表3の人麻呂歌集詩体歌の部立別比率を参照しよう。その他のほとんどは相聞の発想の歌であるから、詩体歌の90%が相聞と言っている。人麻呂歌集詩体歌は、あるいは、恋愛歌の作歌指導書としての意味があったのかもしれない。人麻呂は、宮廷・民間に広く流布し歌われていた、興味・共感を覚えるもので、且つ優れたものを作歌練習・指導のため集録した。それが人麻呂歌集詩体歌であると、私は考える。

しかしながら、単に民謡的に流布していた歌を集録したものに、なぜ人麻呂の名を附したのか、集めた歌を筆録するにあたって、なぜ助詞の省略の多い書式を用いたのか、民謡的に流布された歌が、

なぜ既に五七五七七の形態に整っていたのかと、いう問題を考えねばならないだろう。この時期、政治機構のみならず祭祀・典礼の確立をめざす気運の中で、人麻呂は和歌の確立をもめざしていたのではないか。故に、民謡的に広く流布していた歌を集録するにあたって手を加え、形態を整えたのではなかったか。詩体歌は単なる表記上の省略にとどまらず、多分に詩的感覚が盛り込まれていることが認められている。漢詩に対する意識の表われではなかったか。ただ集めただけでなく、形態・書式に工夫をこらしたものであってみれば、人麻呂の創作歌である常体歌と合わせて、《人麻呂歌集》と名づけたことも頷けるのである。三点の問題に対する簡単な方向づけにとどまるが、さらに熟考が必要なことを記しておきたい。

吉田義孝氏は、地名・労働・信仰・動植物の四項目について、卷十一所収の人麻呂歌集と民謡との関係を検討され、人麻呂歌集の歌、ことにその過半数を占める原作者不明歌が、無条件に民謡とはいいたいことを明らかにされ、また、吉田氏は、次のように述べておられる。

民謡そのものから見るかに遊離した創作的な面が強く指摘される反面、民謡的な側面もまた見逃しがたく濃厚に指摘できるといふ結果となって、まさに、この両者が微妙に交錯しあっているところに、その成立の基盤なり位置なりが見いだされることになると思うのである。こうした一見矛盾した現象は、歌集の原作者不明歌が、民謡のきわめて強い影響のもとに成りたっていること、しかもたんなる民謡の域にとどまることなく、一層高次な創作歌への方向で、独自の展開をあげつつあることを、有力にものがたるものにほかならない。

吉田氏の言われる「一見矛盾した現象」は、これまで私が述べてきたように、人麻呂歌集詩体歌は人麻呂の集めた民謡性の強い歌であり、常体歌は人麻呂の創作歌である、という人麻呂歌集の性格によるものと理解することによって、はじめて解決するものと考えられる。時代的には、詩体歌から常体歌へ、という稲岡耕二氏の説に従いたい。

4

人麻呂の出自、及び天武朝の動向に、天武朝に人麻呂をして如上の事業を可能ならしめた原因を求めることができ、紙面の都合上今はおこ。古代伝承に深いかわりを持つ和珥氏の支族、柿本氏に生を受け、豊かな歌才に恵まれた人麻呂は、天武朝という、天皇を頂点とする強固な律令制度の確立をめざす気運の中で、彼の囲りにあったであろう、広く一般に愛誦された歌で優秀な歌を、作歌練習・指導のため集録し、また修行しつづつ作歌したのではなかったか。それが万葉集に三七〇首もの歌を数える人麻呂歌集詩体歌であり、常体歌であったと考える。

民謡から抒情詩へ、集団から個の歌へ、という流れの分岐点に人麻呂は立っていた。成し遂げたのは外ならぬ人麻呂であった。かつて親しみ、何たるかを知りぬいていたからこそ可能であったのだろう。今はおこが、人麻呂文学の中には、民謡の豊かな素養をみるることができるのである。それまでの、すべての民謡の上に立ち、すべての宮廷歌の伝統をうけ・踏まえ、中国文学の教養を巧みに駆使しながら新たな創作を行なったのが人麻呂であり、人麻呂の文学ではなかったか。

万葉集最大の歌人柿本人麻呂、彼の万葉集に登場する以前の経歴を上のように考えてみた。天武朝にかかる事業を行なった人麻呂は、持統朝にへ時代の歌人として壮大な宮廷讃歌・殯宮挽歌を制作するに至る。その間の事情を探るのが次の問題であり、詳しくは別の機会に譲りたい。

〔注〕

- (1) 土橋寛『古代歌謡論』(一九六〇年十一月二十五日、初版 三二書房刊)、七六頁。
- (2) 注1に同じ。但し、二七頁。
- (3) 注1に同じ。但し、二七頁。
- (4) 阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』(昭和四十七年十一月二十五日、初版、桜楓社刊)、八四六頁。
- (5) 佐佐木信綱『萬葉集の研究第3 萬葉集類歌類句攷』(昭和二十三年七月五日、初版、岩波書店刊)、二頁。
- (6) 注5に同じ。但し、五一頁。
- (7) 注4に同じ。
- (8) 吉田義孝『日本文学研究資料叢書万葉集1』(昭和四十四年十一月二十日、初版、有精堂刊)所収の『天武朝における人麻呂の事業—人麻呂歌集と民謡の関連を中心に—』、七五頁。
- (9) 『国語と国文学』(第四十五卷第五号、昭和四十三年五月発行)掲載の稲岡耕二『人麻呂歌集略体・非略体表記の先後』